

きよの福音 (マタイ 21・28―32)

いつも反省しながら行動しよう

滝野 正三郎

反省

わたしたちは、それぞれ足りない面をたくさんもっています。じぶんでわかっていても、なかなかおすことができないものです。

ただ、お互いにあいての足りない面を責めるのでなく、相手のもっているいい面も見ていくことが大切です。ここでは、じぶんで足りないと思う点を考えて、次に書いてみましょう。

いろんな点で、足りないことがあるようですね。でも、ここで大事なものは、じぶんはこんなに足りない点があるので、だめな人間だと思わないことです。

ひとは、だれでも、足りない点がありますが、いつも反省して、少しでも努力して、じぶんを変えていこうとすることが大切です。

失敗したことや、足りなかった点をくよくよするのではなく、いつも反省しながら、行動していくことが大切なのです。

ですから、くりかえし、じぶんたちのやってきたことについて、反省し、考え直すことがあれば、考え直して、次の行動に移るようにしましょう。

だれが神の国に入るのか

「二人の息子」のたとえで、イエスは何をわたしたちに言いたかったのでしょうか。

このたとえは、だれにむけて言われたのでしょうか。イエスが神殿でひとびとに話をしていたときに、それを喜ばなかった祭司長や、民の長老たちがイエスのと

ころに来たときに、言われたのです。

イエスの時代の祭司長や、民の長老たちは、じぶんたちは、聖書に書かれていることをちゃんと守っているから、当然じぶんたちは神の国に入ることができると思っていました。

ところが、イエスは、このひとたちより、徴税人や娼婦たちのほうが、先に私の国に入ると言っています。ここで、イエスが問題にしているのは、ひとりひとりの行動の結果でなく、それぞれがじぶんの行動に対して、いつも反省し、考え直すべきところは、考え直すように努力しているかということです。

じぶんのしている行動はいつも正しいと思っているひとは、反省しようとしないうし、考え直すこともしないのです。

イエスのまわりに集まって、イエスの話を聞こうとしていたひとたちは、じぶんたちが生活するために、しかたなく、聖書に書かれている律法を守ることができないうひとたちでした。

じぶんたちのしていることが、正しいとは思っていないので、いつも、反省しながら、行動したいと思っ

ていました。

しかし、祭司長や、民の長老たちは、結果だけで判断して、あいつらはだめな人間で、神の国に入るにふさわしくないときめつけていました。

イエスは、いやそうではないということ、たとえば、

神の国に入るにふさわしいひとは、いつもじぶんの行動を反省し、考え直すべき点は、考え直して、次の行動にうつろうとするひとです。じぶんの考えを直さうとしないひとは、神の国に入るにふさわしくないひとなのです。

(京都教区司祭)

